奥山廃寺（奥山久米寺）出土の素文軒平瓦

－飛鳥地域出土瓦の再整理

1　はじめに

明日香村奥山に所在する奥山廃寺は、出土瓦から創建が飛鳥時代初期までさかのぼると推定されている。これまでに出土した軒瓦についてはたびたび紹介されてきた（『藤原概報 18』、『同20』、花谷2000、佐川・西川2000）。現在、考古第三研究室では飛鳥地域出土瓦の再整理を進めつつあり、これまで取り上げられなかった素文軒平瓦の具体像があきらかとなってきた。奥山廃寺出土瓦の全体像についてはなお整理が必要だが、本稿では軒瓦の一種であることからとくに同寺の素文軒平瓦について報告し、軒丸瓦と組み合う可能性や生産地について見通しを述べたい。

2　資料の紹介

紹介する素文軒平瓦はいずれも伽藍西面回廊推定地付近で出土した（『藤原概報３』）。凸面の広端寄りに建物の塗装にともなう赤色塗料の残存、凹面の広端側に風蝕面がみられ軒瓦として用いられたことがあきらかである（図181）。いずれも広端から赤色塗料にかけての距離は12㎝内外で一定しており、これが瓦座からの軒の出と考えられる。胎土、調整の特徴から以下の３類に分類できる。

Ａ　類　　彎曲が他の平瓦よりも緩く、あらかじめ軒瓦として製作された可能性がある。凸面は格子叩きののち全体に長軸方向の指ナデ、のち部分的に短軸方向に板ナデを施す。広端は凹凸両面の角を面取りし、特に凹面は角度が浅く幅も広い。胎土は精良でチャートを多く含み白色を呈し、軟質の焼成。１は全体形を知りうる唯一のもので、長さ48.2㎝、広端の幅36.3㎝。凹面の広端付近とともに狭端付近にも風蝕がみられ、葺き替えにともない軒瓦から平瓦へと転用されたと考えられる。２は１と同様の特徴をもち、広端の幅35.3㎝。同様の色調、焼成で丁寧な調整をもつ瓦はそのほとんどが西面回廊推定地付近に集中する。胎土、焼成の特徴は奥山廃寺出土の軒丸瓦では奥山廃寺式のII型式Dに近似する。

Ｂ　類　　Ａ、Ｃ類に比して彎曲が強く、厚みがある。凸面は格子叩きののち全体を長軸方向に指ナデし、広端の凹凸両面を面取りするが幅は一定しない。胎土には色に濁りのある石英をはじめ砂粒を多く含み、色調は凹凸面とも基本的に黒色で、焼けむらにより部分的に白色が斑状に現れる。断面は表面側が白色で中心が黒色を呈するものと、表面側が橙色で中央が白色を呈するものがある。３は広端端部の凹凸両面に角度が浅く幅が広い面取りを施す。広端の幅35.8㎝。４は広端端部の凹凸両面に幅の狭い面取りを施す。広端面には平行する２本の刻線がみられる。同様の色調、焼成を呈する瓦はＡ類と同じく西面回廊推定地付近に多い。胎土、焼成の特徴は奥山廃寺出土の軒丸瓦では船橋廃寺式のⅣ型式Ａに近似する。

Ｃ　類　　破片資料のみであるが、他種と同様に長軸方向のナデののち短軸方向に板ナデを施す。いっぽうで端面には面取りを施さず、縦断面形は方形である。胎土に透明な石英を中心に砂粒を多く含み、焼成は硬質で明橙色を呈する。５・６の２点を図示したが同一個体の可能性がある。

3　ま と め

以上の素文軒平瓦の年代については、少なくとも重弧文軒平瓦の成立以前、すなわち吉備池廃寺式以前と考えられ、創建期の奥山廃寺を考える上で重要な資料といえる。

素文軒平瓦は通有の平瓦との弁別が困難であるが、Ａ類については当初から軒平瓦として製作されたとみられ、いずれかの軒丸瓦と組み合う可能性を考慮したい。数量の比率から言及することは難しいが、出土地点からは回廊の創建瓦と推定される軒丸瓦II型式Ａ・Ｃ・Ｄ・Ｅ（佐川・西川2000）のいずれかと組み合うと考えられる。

また、Ａ類が奥山廃寺式（Ⅱ型式Ｄ）と、Ｂ類が船橋廃寺式（Ⅳ型式Ａ）の軒丸瓦と胎土の特徴が近似することから、生産地を同じくする可能性を指摘できる。そこで見通しとして、Ａ類が軒丸瓦Ⅱ型式Ｄと組み合う可能性を指摘しておきたい。またＢ類については断面中心が黒色を呈する点が、軒丸瓦Ⅳ型式Ａと同じく岡山県末ノ奥瓦窯の製品と共通する特徴である。胎土分析等をおこなってはいないが、今後検討すべき課題である。

（山本　亮）

引用文献

佐川正敏・西川雄大「奥山廃寺の創建瓦」『古代瓦研究』Ⅰ　奈文研、2000。
花谷浩「京内廿四寺について」『研究論集』XI　奈文研、2000。

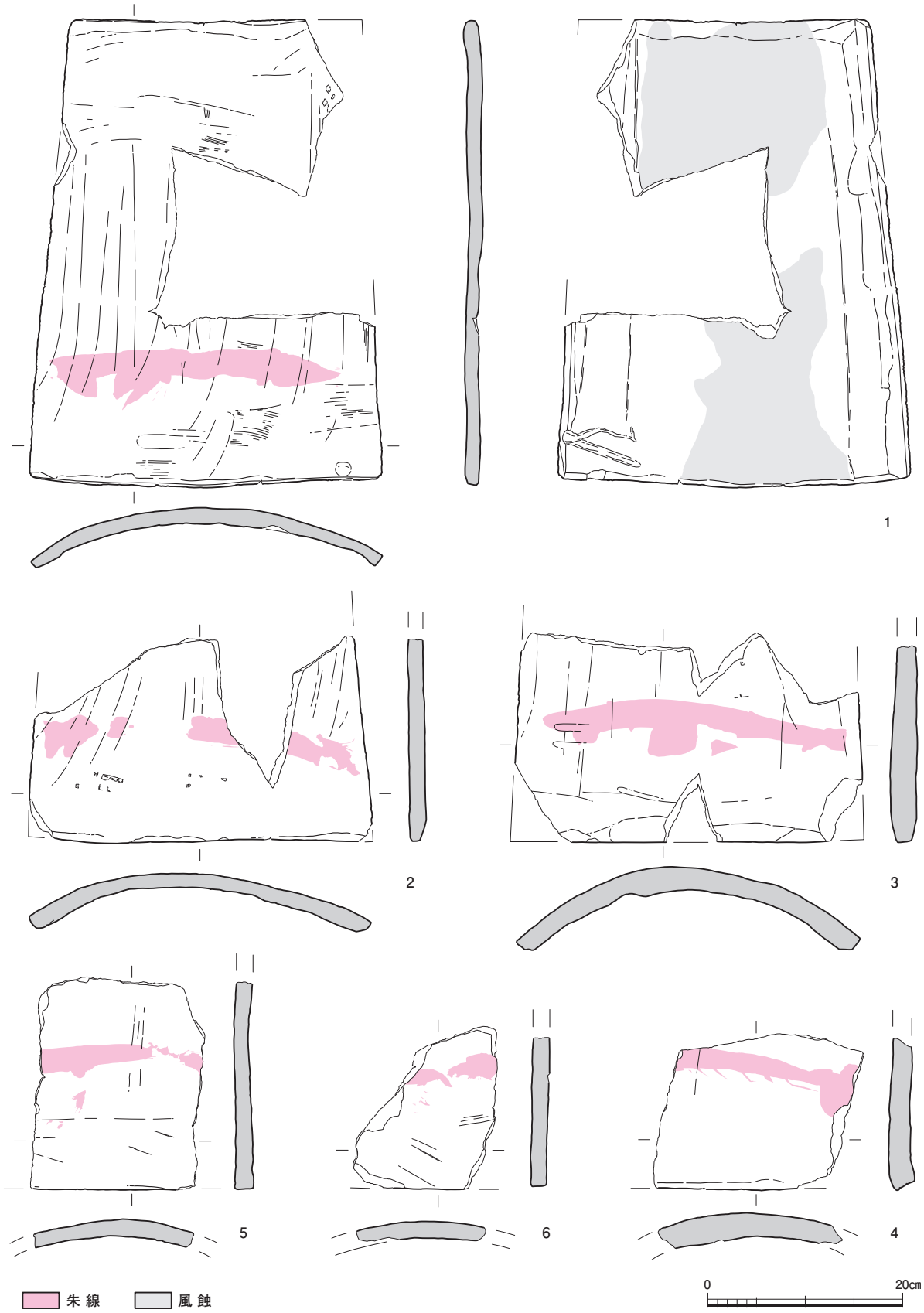

図181　奥山廃寺出土素文軒平瓦　1：6